

黒田明伸氏報告「15 世紀末 16 世紀前半東アジアにおける錢流通の共時性について」

コメンテーター：櫻木 晋一 (下関市立大学)

黒田明伸氏は、『中華帝国の構造と世界経済』(1994: 名古屋大学出版会) と『貨幣システムの世界史』(2003: 岩波書店) において、通説の枠を打破した独自の貨幣論・市場論を展開している。とりわけ『貨幣システムの世界史』は氏の理論の発展・完成型であろう。研究手法としては、単なる机上の理論ではなく、実際に流通していた貨幣を諸史料から丹念に拾い出し、それらを帰納的に類型化している。地域的には中国・インド・日本を考察の中心としながらも中東・西欧・南米など全世界に渉り、時期的にも 18 世紀の中国に端を発した問題意識がその前後に時期を拡張し、古代から現代までの全時代を覆っている。キーワードは貨幣の非対称性であり、現地通貨⇔地域間決済通貨、地域流動性⇔地域間兌換性、支払協団体という概念規定をし、先行研究を咀嚼しながら理論を組み立て、季節性や市場階層性、地域性などによって市場内でも貨幣需要の格差が存在していることを強調している。その研究スケールの大きさは他者の追従を許さないものとなっている。

また、本研究会西日本部会では「近世アジアにおける銀流通」(2001 年 4 月 21 日) というテーマで報告されている。今日のテーマは、本年の東日本部会共通テーマが中世という時期設定である関係上、当該時期における中国・日本を中心とする東アジアに視点を置いた内容となっている。日本が中国錢を受容した理由と、具体的な現地通貨の状況についての明確な言及を期待している。

評者には黒田報告に対して十分なコメントができる力量はないが、以下、評者が事前に理解した氏の報告内容に基づいて、羅列的にはあるが若干の疑問点なりを指摘したい。

撰錢禁止令についての足立啓二説の先見性と誤謬については、撰錢令の中日共時性に着目した先見性には異論が無い。大内氏の撰錢令は、大内領内で中国と全く同様の現象が起こっていたために出されたとすれば、中国のどの地域と同様の状況であったのか。⇒ 北京・辺鎮・大運河沿岸？

また、中国で国家的支払い手段でなくなったからこそ日本に錢貨が流入したとする大田由紀夫氏と、中国の内部貨幣システムに組み込まれていたからこそ中世日本での錢貨流通が盛んになったという足立氏の対立点について、黒田氏のお考えをお聞きしたい。

足立氏が錢種の差異を考慮していないとの指摘については、氏の「東アジアにおける錢貨の流通」(1992: 東京大学出版会) では流通している錢種の差異について認識されていると思われる。

なぜ 15 世紀末から撰錢が問題化し、かつ中日共時現象となったのかという点に関して。

「北京は永樂のみ流通」⇒後著 102 頁では洪武・永樂とあるが？ この洪武・永樂の中国における流通実態についてお教えいただきたい。

1460 年代、江南のどの辺りで私鑄錢が作られていたのか。北京へ流入した私鑄錢の錢種・形状など具体的な内容についてお教えいただきたい。

1485 年の撰錢令(大内氏)には宣徳が永樂と並んで登場するが、中国では宣徳はどのような扱いになっているのか。

新「宋錢」以外の新錢にはどのようなものがあるのか。ここでは上海の新「宋錢」と読めるが、以下に述べてある福建の新「宋錢」とはどのように違うのか。

悪錢とはどのようなものを指しているのか。ワレ、カケ、極小、文字なし？

黒田氏の著書の中で二層構造（現地通貨と地域間決済通貨）や三層構造という用語があるが（後書 90 頁など）、嘉靖以降、銭流通にも多層化がみられるという多層化とは具体的にどのような状況を指すのか。

銭相場の北貴南賤（1460 年ごろ）⇒ 北京・南京・寧波など現地通貨の銭種・形状の違いについて説明願いたい。

福建において銅銭ストックと日本銅が新銭の原料なら、当該期の銭貨は鉛の配合比が増加していると考えられるが、その鉛の供給はどこから受けているのか。

山東では銭を地中から掘り出すとの記述 ⇒ 窖藏銭との関係

福建から舟山列島経由で華北そしてより近い九州へ ⇒ 九州のどこへ流入するのか

「銭色」新銭は見た目にはわかる ⇒ 参考：小倉藩の鑄銭（寛永元年 9 月 14 日の記事）

以下は、黒田氏から頂いた発表のねらい 4 点に関する評者のコメント。

1. 黒田氏は私鑄銭の主要生産地（江南・福建）が共通しているとの考えを示されたが、大変興味深い。例えば、日本の無文銭の鑄造地はその形態のパラエティから分散していると考えられているし、模鑄銭の鑄造地も京都・鎌倉・博多・堺と分散していることが確認できている。評者は日本製の模鑄銭が多いのではないかと考えていたが、日本で出土する制銭でないものが日本産ではなく、まして中国の特定地域で鑄造されたものであるとの指摘が正しければ新説である。  
この問題は煮詰めて考えていきたい重要事項である。
2. 15 世紀末から 1520 年代くらいまでは出来の良い私鑄銭で、1560 年代以降に見た目に悪い私鑄銭が流通するとの指摘については賛成である。とりわけ二段階目に日本では無文銭が流通するようになると考えられる。しかし、無文銭を含めた見た目の悪い模鑄銭は純銅に近いという金属組成の特徴を有し、国内鑄造と考えた方が良い。従って、中国からの私鑄銭流入が盛んであったとの考えには賛成しかねる点もある。
3. 北方辺境軍備への支出のため、私鑄銭が海路北上するとの説は新鮮であった。
4. 当然、開元や永楽の私鑄造が行われていたことは間違いない。（参考一覧表）しかし、これらの制銭でないものが、中国製であるのか日本製であるのかについては、現在のところ特定できない。（永楽の鑄型については日本では発見できていない。）

第21表 一括埋納銭種一覧

銭貨名	初鋳年代	渡来銭	模鑄銭	合計	比率
開元通寶	唐 621	556	121	687	7.7
乾元重寶	" 758	29	1	30	0.3
開元通寶	" 845	58	0	58	0.6
乾元重寶	" 919	3	0	3	0.0
咸康元寶	" 925	1	0	1	0.0
周通元寶	後周 955	1	0	1	0.0
唐國通寶	南唐 959	4	0	4	0.0
開元通寶	" 960	8	0	8	0.1
宋通元寶	北宋 960	22	1	23	0.3
太平通寶	" 976	53	9	62	0.7
淳化元寶	" 990	38	3	41	0.5
至道元寶	" 995	85	3	88	1.0
咸平元寶	" 998	94	7	101	1.1
景德元寶	" 1004	102	9	111	1.2
祥符元寶	" 1009	142	8	150	1.7
祥符通寶	" 1009	97	4	101	1.1
天禧通寶	" 1017	138	5	143	1.6
天聖元寶	" 1023	262	37	299	3.3
明道元寶	" 1032	28	0	28	0.3
景祐元寶	" 1034	91	10	101	1.1
皇宋通寶	" 1038	691	111	802	9.0
至和通寶	" 1054	53	15	68	0.7
至和通寶	" 1054	19	2	21	0.2
嘉祐元寶	" 1056	66	4	70	0.8
嘉祐通寶	" 1056	101	21	122	1.4
治平元寶	" 1064	119	16	135	1.5
治平通寶	" 1064	16	8	24	0.3
熙寧元寶	" 1068	593	41	634	7.1
元豐通寶	" 1078	568	62	630	7.0
" 折二	" 1078	1	0	1	0.0
元祐通寶	" 1086	441	124	565	6.3
紹聖元寶	" 1094	212	27	239	2.7
元符通寶	" 1098	83	4	87	1.0
聖宋通寶	" 1101	227	21	248	2.8
崇寧通寶	" 1102	0	1	1	0.0
大觀通寶	" 1107	95	10	105	1.2
政和通寶	" 1111	267	31	298	3.3
" 折二	" 1111	1	0	1	0.0

銭貨名	初鋳年代	渡来銭	模鑄銭	合計	比率
宣和通寶	北宋 1119	36	1	37	0.4
" 折二	" 1119	3	0	3	0.0
大康通寶	遼 1075	1	0	1	0.0
建炎通寶	南宋 1127	4	0	4	0.0
紹興元寶折二	" 1131	2	0	2	0.0
淳熙元寶	" 1174	28	5	33	0.4
紹熙元寶	" 1190	6	0	6	0.1
慶元通寶	" 1195	5	0	5	0.1
嘉泰通寶	" 1201	6	1	7	0.1
開禧通寶	" 1205	5	1	6	0.1
嘉定通寶	" 1208	24	3	27	0.3
紹定通寶	" 1228	11	0	11	0.1
端平元寶	" 1234	1	0	1	0.0
嘉熙通寶	" 1237	3	0	3	0.0
淳祐元寶	" 1241	8	0	8	0.1
皇宋元寶	" 1253	4	2	6	0.1
開慶通寶	" 1259	1	0	1	0.0
景定元寶	" 1260	13	0	13	0.1
咸淳元寶	" 1265	11	0	11	0.1
" 折二	" 1265	1	0	1	0.0
正隆元寶	金 1157	26	2	28	0.3
大定通寶	" 1178	12	0	12	0.1
至大通寶	元 1310	4	0	4	0.0
大中通寶	明 1361	17	0	17	0.2
洪武通寶	" 1368	1003	2	1005	11.2
永樂通寶	" 1408	1253	82	1335	14.9
宣德通寶	" 1433	103	0	103	1.1
東國通寶	高麗 1097	1	0	1	0.0
朝鮮通寶	李 1423	67	1	68	0.8
大平興寶	丁 970	1	0	1	0.0
大世通寶	琉球 1454	1	0	1	0.0
世高通寶	" 1461	3	0	3	0.0
神功開寶	日本 765	1	0	1	0.0
不明銭		15	67	82	0.9
無文銭		0	9	9	0.1
島銭		0	2	2	0.0
合計		8055	894	8949	100

寛永元年新銭ヲ古  
バカシム

寛永元年九月

一、新銭出来外として、武貫百文清兵衛・忠兵衛銭持参外、江戸へ指上ケ可申外間、其内随分ふるごと  
かし外へと申付被返り、明晩持参外へと、被申付事、

評者は現在、北九州市小倉城馬場跡から大量に出土した清銭を整理中である。これらは陸軍工廠で弾丸等の材料として大陸から持ち込まれ、終戦時に井戸へ廃棄されたと考えられるものである。枚数は10000枚ほどで、この資料から銭貨流通の実態を垣間見ることが出来る可能性をもつ。清朝銭貨最盛期の乾隆通寶が最も多く3000枚ほど、中華民国の貨幣や安南銭、寛永通寶も含まれている。本報告に関連する問題点としては、黒田論文で広範囲に流通していたと紹介されている萬曆通寶が1枚も含まれていないという事実があげられる。清銭は戸部宝泉局で鑄造されたものが断然多いことや、大きさには偏差が大きく、色調から素材が明らかに真鍮であることを確認できる。また、収集界で安南手と称されている小型で薄い寛永通寶なども出土しており、興味深い調査となっている。